



●映画の中のお洋服



ケネス・ブラナーが監督兼主演を務め、ジョニー・デップを含め錚々たる配役で映画化したアガサ・クリスティの名作「オリエンタル急行殺人事件」。とにかくキャスティングがすごくて、とっても見応えありました！お洋服も、仕立てが良さそうな英国っぽいデザインが可愛くて、どれもこれも来てみたいくなります。この冬はかっちりとした英国スタイルも良いかもしれません。

Miss Patina の英国ルックな冬のお洋服です。なんとなく、オリエンタル急行の世界観に近くなって思います！私も秋冬に「オリ急コーデ」に挑戦してみよう！

→ moviegoer.jp



●ハンドメイドブランド hinagiku について

考えてみれば、小さい頃から刺繍とか好きでした。大学も実は被服科でした。なのに何故手作りしてなかったのかなあ？と今では不思議です。ずっと忙しく走ってきて、コロナ禍でテレワークをさせてもらい、マスク作りをきっかけにハンドメイドに目覚めてしまいました。まだお洋服をお届けするまでには至りませんが、かわいいマスクや小物を安心の日本製素材で作りたいと思いました。

ブランド名の由来は、映画ファンの皆様はお気づきかと思いますが映画の「ひなぎく」から拝借しております。また「ユー・ガット・メール」のヒロインの好きな花デジでもあります。女子はひなぎくなのです！ということで、これからも「hinagiku」をどうぞよろしくお願いいたします。



▲エバークールコットンマスク

一枚一枚手作りで仕上げています。



▲のぎくのマスクと同じ布で、サブバッグを作りました。近日アップの予定です。



◀ノベルティで作ったリボンシュシュ。私も愛用しています♪

ひなぎくの森

第一話

文 * sawori

子供の頃からひなぎくが好きだった。おばあちゃんちの庭にたくさん咲いていた小さな白い菊。それを積んで花かんむりにしたり、花束にしてお母さんのお墓に飾ったりした。シンプルで可憐。太陽とともに開き、閉じる。

ある日、昔を思い出してひなぎくの花かんむりをつけて、おばあちゃんちの縁側でうたた寝していると「ボンジュール」と聞きなれない言語がして目を覚ました。その人は髪が金色で、目が青くて、完全に絵本の中の王子様だった。「すてきなお姫様、それはデイジー？デイジーは日本語でなんて言いますか？」王子様がおばあちゃんにそう聞くと「ひなぎくじゃよ、フランソワ」と答えた。二人の絵面と会話がシュールだなと思った。

「じゃあ、ひなぎく姫ですね。」

完璧なルックスのフランソワは18歳。日本の大学に留学するためにおばあちゃんちでホームステイするらしい。純和風の日本家屋に住んでみたかったそう。

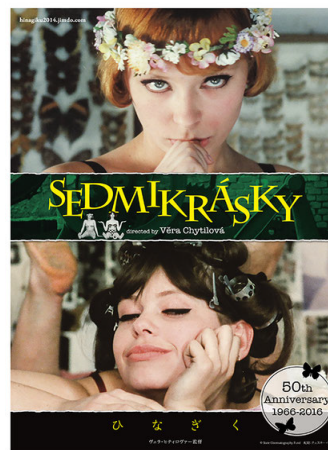
「わたし、名前もほんとうにひなぎくっていうの。」変わった名前とからかわれた幼き日々。25歳の現在ではみんな大人で「へえ」とスルーしてくれる。「テレビアン！美しい名前ですね。あなたの名前の素晴らしい映画があります。」フランソワはそう言って、わたしの手の甲にキスをした。
お母さん！おばあちゃんちにフランスの王子様が来たよ！ つづく・・・

純和風の日本家屋で繰り広げられる、ひなぎくとフランソワのカルチャー交流記「ひなぎくの森」。映画、音楽、ファッション、そして恋愛なんかも織り込んでいけたらと思っています。

* sawori *

* ひなぎくの森のカルチャーその1 *

映画「ひなぎく」



『ひなぎく』(Sedmikrásky/'66/ カラー / チェコ・スロヴァキア / 75分) 監督:ヴェラ・ヒティロヴァー

マリエ1とマリエ2は、姉妹と偽り、男たちを騙しては食事をおごらせ、嘔吐きの後、笑いながら逃げ出す。部屋の中で、牛乳風呂を沸かし、紙を燃やし、ソーセージをあぶって食べる。グラビアを切り抜き、ベッドのシーツを切り、ついにはお互いの身体をちょん切り始め、画面全体がコマ切れになる。色ズレや、カラーリング、実験的な効果音や光学処理、唐突な場面展開など、あらゆる映画的手法が使われ、衣装や小道具などの美術や音楽のセンスも抜群。60年代チェコ・ニューヴェルヴァーグの傑作。



インスピレーションの泉のようなわたしのアイコン的映画「ひなぎく」。若さに任せて悪ふざけするなぜか憎めない少女2人。ヌーヴェルバーグ的な映像や内容はぶっ飛んでいるが、ガリーのセンスは半端なく、どのシーンをとっても絵になり、お洋服も髪型もとにかく可愛い、女子必見の映画です。

